大衆日報

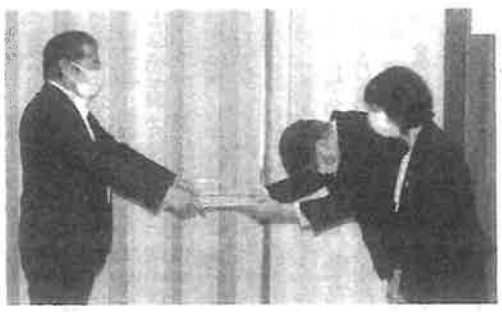
大衆日報社
発行責任者：越川和恵
銚子市春日町 3218-1
電　話 0479(25)0030
ＦＡＸ 0479(25)1100
電子メール
taishunippo@wine.ocn.ne.jp
購読料１カ月 1,900円
郵　送１カ月 2,800円

ガラスリソーシング㈱に感謝状

千葉しすい病院運営 医療法人社団千葉光徳会が贈呈

消毒液とマスクを無償提供

「地獄に仏」と沼山看護部長が感謝



ガラスリソーシング㈱の伊藤憲一会長に感謝状を贈呈する千葉しすい病院の山本陽史事務長。隣は沼山美和看護部長

「ガラスリソーシング様には、千葉県内で新型コロナウイルスの感染拡大が続いていた4月末、知り合いのツテを辿って訪問させていただいた折に、快く大量のアルコール消毒液や次亜塩素酸、マスクをお譲りいただきまして、感謝してもし切れないほどです」と話すのは千葉しすい病院（印旛郡酒々井町）の沼山美和看護部長だ。

沼山看護部長は山本陽史事務長とともに5月20日（水）、ガラスリソーシング㈱（銚子市春日町）を訪ね、千葉しすい病院を運営する医療法人社団千葉光徳会の徳田哲理事長からの感謝状をガラスリソーシングの伊藤憲一代表取締役会長に贈呈した。

感謝状

ガラスリソーシング㈱
代表取締役会長
伊藤　憲一様

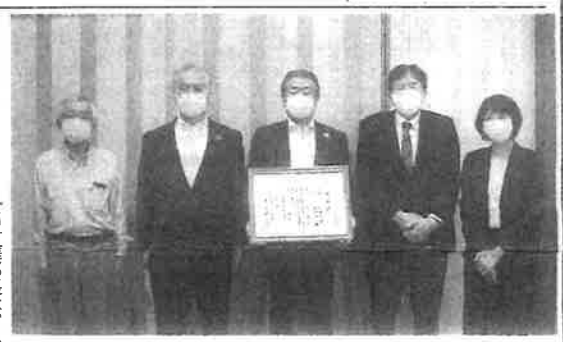
貴社は新型コロナウイルス感染症により医療資材等が不足しているなかサージカルマスク等の医療物資の寄付をされました

よってここにそのご厚意に対して深甚なる感謝の意を表します

令和2年5月18日
医療法人社団千葉光徳会
理事長　徳田　哲

銚子に勤務していた友人からの情報でガラスリソーシング知る

新型コロナウイルスが千葉県で猛威をふるっていた真っ最中の4月下旬。千葉しすい病院の沼山美和看護部長は、以前銚子市内に勤務していた知人の紹介で「危機管理意識が高く災害時のために蔵を建て、物資を備蓄しているガラスリソーシングという会社がある」と知り、ほうほうの体でガラスリソーシング㈱を訪ねた。



左から鈴木芳明顧問、赤坂修社長、伊藤憲一会長、千葉しすい病院の山本陽史事務長、沼山美和看護部長

医療現場の最前線支える人を支援！

全く見ず知らずの沼山看護部長を迎えた伊藤憲一会長、赤坂修社長は、「医療現場の最前線で働いている皆さん、ご苦労様です」

「当社は危機管理を徹底しており、災害時に住民や社員に備蓄物資を提供すべくマスクや消毒液だけでなく、食料品やフェイスシールドなども貯蔵しております」

「医療の最前線で決死の覚悟で活躍している皆さんのためですから、何でも持って行ってください」と温かいエールをおくり寄贈を即断。

医療法人社団千葉光徳会の徳田哲理事長からガラスリソーシング㈱伊藤憲一会長への感謝状

伊藤会長の先見の明

伊藤会長は昨年12月末に「中国で新型肺炎発生」のニュースをキャッチするや、すぐに「これは大変なことになる」と海外事業部を統括する赤坂社長に命じてマスクを大量に買いつけた。これは日本でマスク不足が発生する以前のことで、伊藤会長の先見の明が功を奏し、後に多くの医療関係者や介護事業者を救った。

千葉しすい病院の山本陽史事務長、沼山美和看護部長を災害用備蓄倉庫“蔵”へ案内！

無料で消毒液とマスクを提供

ガラスリソーシングを訪ねた沼山看護部長は、「有償でお譲りいただくつもりでしたが、なんと無料でアルコール消毒液や次亜塩素酸、マスクを大量にご寄贈いただいたんです。驚きとともに、“地獄に仏”とはこのことか…と心から感謝し、涙が溢れ出てきました」と語る。

実は、千葉しすい病院を運営する医療法人社団千葉光徳会が運営する介護老人保健施設・あきやまの郷（松戸市）で新型コロナ感染者が出ており同じ系列の千葉しすい病院も危機感を募らせていたのだ。山本陽史事務長は、

「消防署からは、新型コロナの感染疑いがある人は運ばないと拒否され、一方でマスクや消毒液は底を突くという究極の事態に追い込まれていました。そんな折に、沼山看護部長が知り合いのツテを辿って訪問させていただいたガラスリソーシング様に温かいご寄付をいただき、病院関係者だけでなく系列の施設一同、心から感謝しております」と目を潤ませて…。

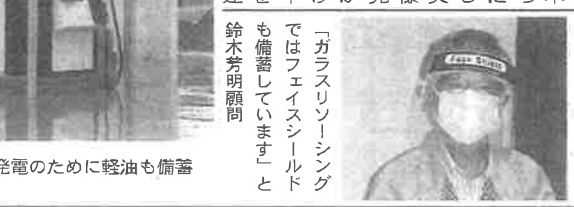
災害用備蓄倉庫“蔵”の豊かな備蓄品、VIP並みの避難ルームに驚きを隠せない千葉しすい病院の山本陽史事務長、沼山美和看護部長（右）

万が一の事態に備えた、災害用備蓄倉庫“蔵”

ガラスリソーシング㈱の伊藤会長は、「我々は万が一の災害時に備えて“蔵”に備蓄し必要とされる方々のために提供する覚悟でおります。ところが、行政は医療現場が大変な時にSOS発信しないんですね。4月末に沼山看護部長が**当社に駆け込んで来られた時には、切羽詰まっている様子が伝わって気の毒になりました。我々ができることなら助けたいという気持ちになりました**」と労った。

ガラスリソーシング㈱は東日本大震災後、常に危機管理意識を持ち、本業のリサイクル業の傍ら地域住民や社員のために災害時の備えを万全にしてきた。平成28年には災害用備蓄倉庫“蔵”を漆喰・なまこ壁のパッと見目立つ外観で建て、万が一の災害時に住民が駆け込めるように配慮。太平洋を広く見渡せる立地を生かして危機管理棟を建て、銚子市とは平成28年、銚子警察署とは平成29年に「災害時における協定」を締結している。

ガラスリソーシング㈱では、災害時の発電のために軽油も備蓄している



「ガラスリソーシングではフェイスシールドも備蓄しています」と鈴木芳明顧問

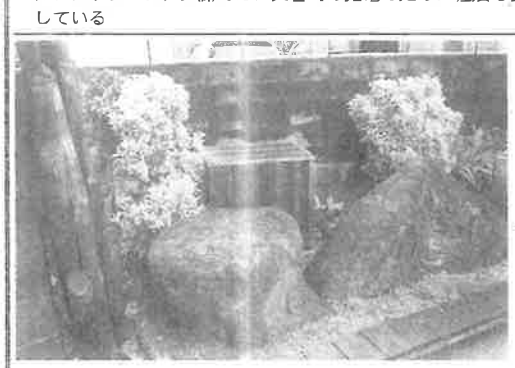
備蓄食料は伊藤会長の好みが色濃く（笑）

赤坂修社長は、「備蓄している食料も、伊藤会長の好みが色濃く現れておりまして…甘いぜんざいや羊羹など普通の保存食にはない特長があります（笑）。もちろん米やサバの水煮缶、豚汁など普通の食事も備えておりますよ」と語り、感謝状贈呈式に臨んだ皆さんを笑いで和ませた。

贈呈式を終えた千葉しすい病院の2人は、伊藤会長の案内で災害用備蓄倉庫“蔵”を見学。まずは漆喰となまこ壁という独特の外観に圧倒され、一歩中に足を踏み入れるや、**寝袋**からバリエーション豊富な食料品、果てはオムツや生理用品まで…とその備蓄内容に驚かされた。2階へ上がると、まるでVIPルームのようなしつらえが目に飛び込み、

「1階には質量ともに豊富な備蓄品、2階は避難してきた方々が安心して心身を休められる空間があり、私ども病院としても非常に参考になりました。新型コロナが収束した暁には、病院職員と共におじゃまして危機管理について勉強させていただきたいと思います」

と山本事務長、沼山看護部長は、ガラスリソーシングの「備えあれば憂いなし」精神に驚愕した表情で語っていた。



災害用備蓄倉庫“蔵”の前には地下１００ｍから汲み上げた飲める井戸水があります！

【今やるべきことをやり未来の道へ】

私たちの暮らしが豊かで便利になった反面、急激な経済の拡大によって自然環境に様々なほころびが目立つようになりました。特に、大量の廃棄物がもたらす影響は大きく、資源と地球の許容量には限りがあることを私たちは認識する必要があります。

21世紀も暮らしやすい生活を維持していくには環境を守りながら円滑なリサイクル社会を築いていくことが欠かせません。

ガラスリソーシング㈱は、当社の環境理念にも示しております「もったいない」を基本理念とし今後ますます拡大する廃棄物を「廃・資源」と考え、あらゆる環境社会に順応していくために様々な研究・調査等を重ねてまいります。

これからも静脈産業のパイオニアとして革新的な製品、開発、システムを実現化し「廃・資源」に新たな価値を創造すべく努力と挑戦を続け、21世紀の環境社会に貢献していきます。

【災害用備蓄倉庫“蔵”概要】

平成23年3月11日午後2時46分、東北地方を襲った東日本大震災。私たちの本社がある銚子市春日町でも激しい揺れがあり、異常な勢いで引いていく潮を見て、これまで感じたことのない恐怖が湧き上がったものです。私たちが生きてきた中で日々「当たり前」のように過ぎていく日常に対する「安心感」が崩れ落ちた瞬間でした。一時的ではありましたが断水、食料品や燃料の不足、いつ終わるかわからない余震の恐怖の中で、何事もなく過ぎていく日常のありがたさを痛感いたしました。その「当たり前」の「安心感」が、この「蔵」プロジェクトの原点となっております。従業員、近隣住民の安心と安全。銚子市との災害時における物品の提供についての協定書を締結したことで、その「安心感」はさらに広がっていきます。私たちは地域に根ざし、地元を愛する企業として、まだ始まったばかりの試みですがこの「蔵」で「当たり前」の「安心感」を拡げていきます。